

いじめの防止等のための基本的な方針

新座市立第三中学校

令和7年4月

目 次

はじめに	1
1 いじめに関する定義	
2 いじめの防止等の対策に関する基本理念	
3 いじめの防止等のための学校及び教職員の責務	
4 いじめの防止等のための保護者の責務等、生徒の役割	
5 いじめ対策のための校内組織	3
6 いじめの防止等のための対応	
7 学校が実施する、いじめの防止等のための具体的取組	
8 「重大事態」の対応について	4
9 その他いじめの防止等のための対策に関する重要事項	

はじめに

新座市立第三中学校では、いじめ防止対策推進法（平成25年法律第71号）第13条の規定に基づき、生徒が安心して学校生活を送ることができる学校づくりに努めるとともに、いじめの防止等の対策を教職員が組織一丸となって効果的に推進できるようにするため、「いじめの防止等のための基本的な方針」を策定するものである。

1 いじめに関する定義

(1) いじめの定義

（法第2条第1項）

この法律において「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

(2) いじめが「解消している」状態の定義

文部科学省による「いじめの防止等のための基本的な方針」が平成29年3月に改定され、いじめが「解消している」状態について明記された。以下は、その抜粋である。

いじめが「解消している」状態とは、少なくとも次の2つの要件が満たされている必要がある。ただし、これらの要件が満たされている場合であっても必要に応じ、他の事情も勘案して判断するものとする。

①いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。ただし、いじめの被害の重大性等からさらに長期の期間が必要であると判断される場合は、この目安にかかわらず、学校の設置者又は学校いじめ対策組織の判断により、より長期の期間を設定するものとする。学校の教職員は、相当の期間が経過するまでは、被害・加害児童生徒の様子を含め状況を注視し、期間が経過した段階で判断を行う。行為が止んでいない場合は、改めて、相当の期間を設定して状況を注視する。

②被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害児童生徒がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。被害児童生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

2 いじめの防止等の対策に関する基本理念

(法第3条)

- 1 いじめの防止等のための対策は、いじめが全ての児童等に関係する問題であることに鑑み、児童等が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、学校の内外を問わずいじめが行われなくなるようにすることを旨として行われなければならない。
- 2 いじめの防止等のための対策は、全ての児童等がいじめを行わず、及び他の児童等に対して行われるいじめを認識しながらこれを放置することがないようにするため、いじめが児童等の心身に及ぼす影響その他のいじめの問題に関する児童等の理解を深めることを旨として行われなければならない。
- 3 いじめの防止等のための対策は、いじめを受けた児童等の生命及び心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、国、地方公共団体、学校、地域住民、家庭その他の関係者の連携の下、いじめの問題を克服することを目指して行われなければならない。

3 いじめの防止等のための本校及び教職員の責務

(法第8条)

学校及び学校の教職員は、基本理念にのっとり、当該学校に在籍する児童等の保護者、地域住民、児童相談所その他の関係者との連携を図りつつ、学校全体でいじめの防止及び早期発見に取り組むとともに、当該学校に在籍する児童等がいじめを受けていると思われるときは、適切かつ迅速にこれに対処する責務を有する。

- ① 教職員は、法の定める「いじめの定義」を正しく理解し、また児童生徒に『どんなことがいじめに該当するか』を正しく理解させる。
- ② 教職員は、「いじめは、どの子どもにも起こり得る可能性がある。」という認識の下、学校として配慮が必要な児童生徒については、日常的に、当該児童生徒の特性を踏まえた適切な支援を行うとともに、その特性がいじめにつながることを防ぐよう、保護者との連携、周囲の児童生徒に対する必要な指導を組織的に行う。
(例)
 - ・発達障がいを含む、障がいのある児童生徒
 - ・海外から帰国した児童生徒や外国籍の児童生徒
 - ・性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒
 - ・その他、学校として配慮が必要であると判断する児童生徒
- ③ 教職員は、児童生徒が感じる被害性に着目し、いじめに該当するか否かを判断する。
- ④ 教職員は、いじめに係る情報を抱え込むことなく、「学校いじめ問題対策委員会」に報告を行い、組織的に対応する。
- ⑤ 学校及び学校の教職員は、いじめを発見したら、必ず児童生徒を守り抜くという強い決

意と態度で対応する。

- ⑥ 学校は、「学校いじめ防止基本方針」を定め、いじめの防止等のための取組を実施する。
- ⑦ 学校は、教職員や地域人材、専門的知識を有する者等※からなるいじめの防止等のための組織を設置する。
※学校運営協議会委員、民生委員、大学教授、人権擁護委員、教職経験者、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等
- ⑧ 学校は、児童生徒のいじめ問題に対する意識を高めるとともに、豊かな人間性や社会性を育む取組の充実を図る。
- ⑨ 学校は、学校いじめ防止基本方針及びいじめの防止等のための取組が機能しているか点検し、必要に応じて見直しを行う。
- ⑩ 学校は、学校警察連絡協議会等を活用するとともに、学校・警察連絡員（学警連担当者）を指定し、日常的に警察との連携体制の構築を図る。

4 いじめの防止等のための保護者の責務等、生徒の役割

(1) 保護者の責務等

（法第9条）

- 1 保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、その保護する児童等がいじめを行うことのないよう、当該児童等に対し、規範意識を養うための指導その他の必要な指導を行うよう努めるものとする。
- 2 保護者は、その保護する児童等がいじめを受けた場合には、適切に当該児童等がいじめから保護するものとする。
- 3 保護者は、国、地方公共団体、学校の設置者及びその設置する学校が講ずるいじめの防止等のための措置に協力するよう努めるものとする。
- 4 第一項の規定は、家庭教育の自主性が尊重されるべきことに変更を加えるものと解してはならず、また、前三項の規定は、いじめの防止等に関する学校の設置者及びその設置する学校の責任を軽減するものと解してはならない。

- ① 保護者は学校による指導と連携して、家庭において、いじめは絶対に許されないことをしっかりと子供に教育するよう努める。
- ② 保護者は、日頃より子供に声をかけ、子供の話をよく聴き、子供の些細な変化を見逃さないよう努める。また、子供の些細な変化に気が付いた時は、学校に相談する。
- ③ 保護者は、家庭において、子供に、基本的な生活習慣を身に付けさせ、規則正しい生活をさせる等して、心の安定を図るよう努める。

(2) 生徒の役割

（法第4条）児童等は、いじめを行ってはならない。

- ① 児童生徒は、お互いを認め合える人間関係作りに努める。
- ② 児童生徒は、発達段階に応じていじめの定義を理解した上で、いじめの問題を自分たちの問題として受け止め、自分たちでできることを主体的に考え、行動するよう努める。
- ③ 児童生徒は、いじめを発見したら、勇気をもって、そのことを周りの大人に相談したり、止めたりするなど、決して見逃さないよう努める。

5 いじめ対策のための校内組織

いじめ等の対策を実効的に行うための組織として、「第三中学校いじめ対策委員会」を設置する。

(1) 構成員

校長の指揮の下、教頭、主幹教諭、いじめ対策担当者を中心に、教務主任や生徒指導主任、学年主任、教育相談主任、養護教諭等の中から本校の実情により充て、個々の事案に応じて学級担任や部活の顧問、さわやか相談員、子どもと親の相談員、スクールカウンセラー（ＳＣ）、等も加えることができるものとする。また、必要に応じて新座市教育相談員や新座市学校カウンセラー、スクールソーシャルワーカー（ＳＳＷ）の他、学校以外の人材として学校サポートチーム、学校運営協議会委員や民生委員等の参加を図る。

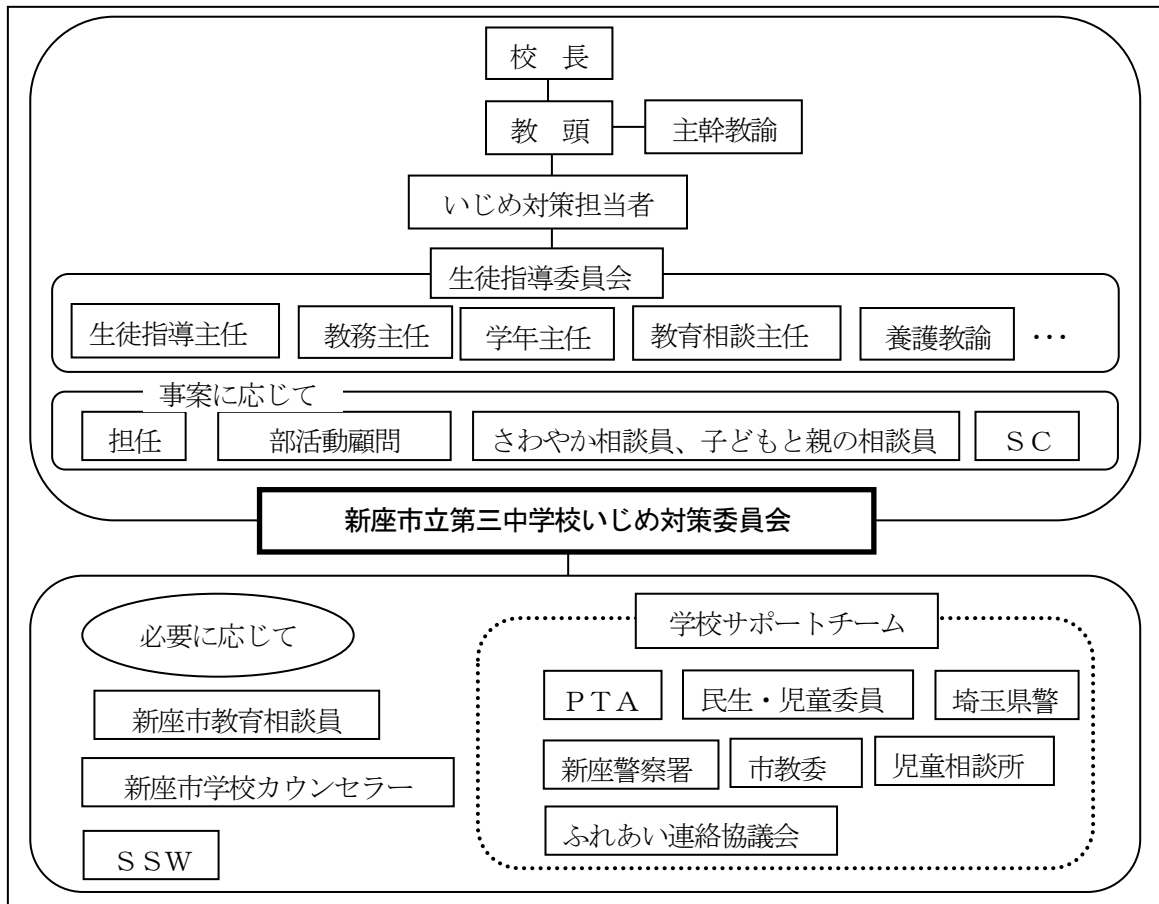
(2) 活動内容

- ① 基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成や実行、検証、修正
- ② 教職員の共通理解と意識啓発
- ③ 生徒や保護者、地域に対する情報発信と意識啓発、意見聴取
- ④ いじめの相談や通報の窓口
- ⑤ いじめの疑いについての情報や生徒の問題行動等に係る情報の収集、記録、共有
- ⑥ いじめであるか否かの判断（傷つきがあるか否かの判断）
- ⑦ いじめ事案に対する組織的な対応
 - ・いじめの被害生徒に対する支援体制と対応方針の決定
 - ・いじめの加害生徒に対する指導体制と対応方針の決定
- ⑧ 保護者との連携
- ⑨ 構成員の決定
- ⑩ 重大事態への対応
- ⑪ 上記に掲げるもののほか、いじめの防止等に関する事項

(3) 開催時機

- ① 平常時は定期的（月１回）に開催する。
- ② いじめ事案が発生した場合は、緊急で開催する。

(4) 組織図



(4) 生徒で構成される組織

生徒は、いじめの問題について考え、いじめを許さない集団やいじめを見逃さない学校を作ろうとする意識を高め、いじめの防止等の取組を推進するよう努める。

① 組織の例

- ・ 学年及び学級
- ・ 生徒会
- ・ 各委員会の代表による組織等

② 活動内容の例

- ・ いじめ撲滅に向けた話し合い
- ・ 学校への提言

6 いじめの防止等のための本校及び保護者、生徒の対応

(1) 本校の対応

- ① 学校は、全ての教育活動を通して、児童生徒を見守り、市内共通形式のアンケート等も活用しながら、面談等その他必要な措置を講ずることにより、児童生徒の些細な変化を見落とさず、いじめの早期発見に努めるとともに、記録を取り、情報の共有に資する。
- ② 学校は、保護者に対して、入学説明会や保護者会等を通じて、いじめ対応における学校

への協力を求め、「学校いじめ防止対策基本方針」や相談窓口の周知等を行い、いじめ対策の普及啓発を図る。

- ③ 学校は、市民等からの通報があった際には、速やかに事実の確認と対応を行うとともに、教育委員会へ報告する。
- ④ 学校は多様な子供たちの特性を踏まえ、特に配慮が必要な児童生徒については、日常的に、当該児童生徒の特性を踏まえた適切な支援を行う。また、進級の際の学年間、あるいは小学校から中学校・中学校から高等学校等への進学時には学校間で、その特性や支援策について確実に情報共有し、切れ目ない支援の継続が図れるようにする。
- ⑤ 学校は、保護者や関係機関※とも情報共有し、配慮が必要な児童生徒への支援について連携を図ること。

※児童相談所、民生・児童委員、新座市福祉部局、教育委員会等

- ⑥ 学校は、いじめを受けた児童生徒の安全確保を第一に優先し、正確な状況把握のもと、必要に応じて、関係機関・団体と連携しながら適切かつ迅速な対応を行う。
- ⑦ 学校は、いじめを行った児童生徒に対しては、教職員全員の共通理解、保護者の協力、関係機関等と連携の下、毅然とした態度で指導する。その際、人格の成長に主眼を置き、問題の再発を防ぐ教育活動を行うという考えで指導し、その後の経過を見守る。
- ⑧ 学校は、いじめ問題にかかる校内研修を年に複数回実施し、教職員のいじめの防止等のための対策に関する資質能力の向上を図る。
- ⑨ いじめが犯罪行為に相当し得る、また、連携して解決にあたる必要があると認められる場合には、警察への相談・通報を行う※。また、そのことについて、あらかじめ保護者に対して周知を行う。

※令和5年2月7日付「いじめ問題への的確な対応に向けた警察との連携等の徹底について（通知）」を踏まえ、警察に相談・通報すべきいじめの事例等を参考とすること。

(例) ・暴行：ゲームや悪ふざけと称して、繰り返し同級生を殴ったり、蹴ったりする。
・強要：度胸試しやゲームと称して、無理やり危険な行為や恥ずかしい行為をさせる。

・児童ポルノ：スマートフォンで自身の性器や下着姿などの写真・動画を撮影して送るよう指示し、自身のスマートフォンに送らせる。

(2) 保護者の対応

- ① 保護者は、家庭において、子供の様子をしっかりと把握し、些細な変化に気づいた時には直ちに学校に相談する等、学校と連携するよう努める。
- ② 保護者は、自分の子供がいじめの被害を受けたり、他の子供のいじめの事実を把握したりした場合には、直ちに学校に情報提供するなどして、学校と連携協力しながら対応するよう努める。
- ③ 保護者は、自分の子供がいじめの加害者となった場合は、学校に協力し、その解決を図る

とともに、自分の子供を指導するよう努める。

- ④ 保護者は、誰でもいじめの被害者や加害者になり得ることを理解した上で、感情的に行動することなく、客観的、多面的に判断しながら、自分の子供や他の子供が安心して学校生活を送れるよう学校と連携しながら、いじめの問題に取り組むよう努める。

(3) 生徒の対応

- ① 児童生徒は、一人で悩みを抱え込まず、必ず周りの人に相談する。
- ② 児童生徒は、友達から相談されたときは、しっかりと話を聞く。
- ③ 児童生徒は、友達の悩みを知ったり、様子の変化に気づいたりし、自分たちだけでは解決できないときは、周りの大人に相談する。
- ④ 児童生徒は、いじめを発見したら、勇気をもって周囲の大人や学校に知らせたり、相談したりするなど、いじめを決して見逃さないようにする。

7 学校が実施する、いじめの防止等のための具体的取組

(1) 児童生徒アンケートによる実態把握と日常的な対応

- ① 市内共通様式となる「無記名式」アンケートを毎月（8月を除く）実施し、潜在的ないじめの有無を確認する機会とする。
- ② 児童生徒の状況に応じて、記名式アンケートを実施する学校は、教育委員会の認めるところにより、各学校で作成した質問紙等において実施ができる。
- ③ 強制的な実施ではなく、児童生徒の意思により随時自由回答できる校内環境を整える場合には、市内共通様式を記名式に変更して活用することができる。
- ④ 質問紙の結果については、速やかに管理職に報告するとともに、全教職員で共通理解を図り、校内いじめ問題対策委員会、職員会議、学年会議、生徒指導委員会等において、組織的に適切に対応できるようにする。
- ⑤ 実施結果については、毎月定期的に教育委員会に報告するものとする。
- ⑥ アンケート用紙の回収にあたっては、記入した内容が周りに分からないように十分配慮するとともに、実態に応じて紙面回答もしくは電子回答を選択して調査を実施する。
- ⑦ アンケート用紙およびデータは、実施後5年間の保存※とし、教育委員会から指示があった場合は提出する。※5年後の年度末までの保存とする。

(2) 保護者用チェックリストによる実態把握と情報共有

- ① 保護者の気づきをいじめ根絶に向けた情報として共有し、連携を深めるために保護者用チェックリストを配布し回収する。
- ② 実態に応じて紙面回答もしくは電子回答を選択して調査を実施する。
- ③ 強制的な実施ではなく、保護者の意思により随時自由回答できる校内環境を整える場合には、市内共通様式を記名式に変更して活用することができる。
- ④ 時期は、不登校が急増する5月末、9月末、1月末とし、全家庭に配布する。

- ⑤ 保護者からの申出があった場合は、担任もしくは保護者と信頼関係のある者が相談活動を行う。
- ⑥ アンケート用紙およびデータは、実施後5年間の保存※とし、教育委員会から指示があった場合は提出する。※5年後の年度末までの保存とする。
- (3) 教師用チェックリストによる実態把握と個別案件への対応
- ① いじめ問題を発見する手立てとしての基本策である。校内の状況に応じて紙面回答もしくは電子回答を選択して調査を実施する。
- ② 毎月1回実施し、児童生徒の様子を定期的に観察するとともに、実施後は、学年主任、生徒指導主任等が集約し、速やかに校長、教頭に報告する。
- ③ 職員会議及び生徒指導委員会等で情報を共有し、個別の案件について組織的に対応する。
- ④ チェックリストは、実施後5年間の保存※とし、教育委員会から指示があった場合は提出する。※5年後の年度末までの保存とする。
- (4) インターネットを通じて行われるいじめ防止の取組
- ① インターネット利活用を通して、他律から自律へ向かう児童生徒のデジタル・シティズンシップ教育を推進する。
- ② 教職員は、ネットトラブル等を題材として、学級活動における指導を行う。
- ③ 学校は、児童生徒のインターネット利用に関する理解を深めるとともに、ネットトラブル等の危険性について意識啓発を図るため、警察職員、電気通信事業者等による非行防止教室を実施する。
- ④ 教育委員会や学校は、保護者のネットトラブル等に関する意識啓発を積極的に行うため、機会を捉えて適切な情報提供を行う。
- ⑤ 教育委員会や学校は、フィルタリングの必要性について、児童生徒及び保護者に対し、機会を捉えて意識啓発を図る。
- ⑥ PTAや保護者会が主体となってネットトラブル等の防止のための取組を行う場合は、学校も協力し、取組の支援を行う。
- (5) 学級経営
- ① 安心して生活できる居場所づくり
- ・ 教職員は、児童生徒の気持ちを共感的に受け止める。
 - ・ 教職員は、児童生徒に、学級で責任を果たすことのできる役割を与える。
 - ・ 教職員は、学級のルールを基盤に、公正さを欠かない姿勢を持ちつつ、児童生徒の多様性を理解し、柔軟に学級経営にあたる。
- ② 児童生徒同士、教職員との人間関係づくり
- ・ 教職員は、児童生徒に、自分のよさに気付かせるとともに相手のよさにも気付かせ、互いの違いを認めることができるようにする。
 - ・ 教職員は、多様性を認め合う学級風土を醸成する。

- ・教職員は、授業や給食清掃指導、行事等、全ての教育活動の中で、児童生徒に自己有用感、自己効力感をもたせられるよう意識した指導を努める。
- ・教職員は、公正かつ柔軟なリーダーとフォロワーを組織する。

(6) 学習指導

- ① 教職員は、各教科において、一人一人の考えや意見が尊重され、自他の違いを認め合うような授業を展開し、学ぶ喜びや学び合う楽しさを味わわせるようにする。
- ② 教職員は、学業不振やその心配のある児童生徒には補習などの学習支援を行い、学習意欲を喚起、持続できるようにする。
- ③ 教職員は、校内研修、公開授業等で授業を見合う等、研究と修養に努め、授業改善にあたる。
- ④ 教職員は、インクルーシブの理念に基づいた特別支援教育を推進する。
- ⑤ 教職員は、道徳の時間を要として、生命を大切にする心や他人を思いやる心、善悪の判断等、規範意識や道徳性を身に付けさせる。

(7) その他

- ① さわやか相談員、子どもと親の相談員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携
- ② 担任外教諭、養護教諭、特別支援教育支援員、交通指導員等との情報交換
- ③ 新座市教育相談室との連携

8 「重大事態」の対応について

いじめ問題への対応については、日頃から市教育委員会との連携を密にする。特に、「重大事態」に至った場合もしくは判断に悩む場合も、直ちに市教育委員会に報告し、市いじめ問題対策委員会との連携を図る。

(1) 重大事態の意味（いじめ防止対策推進法第28条から）

いじめにより、

- ・生徒が自殺を企図した場合
- ・身体に重大な傷害を負った場合
- ・金品等に重大な被害を被った場合
- ・精神性の疾患を発症した場合
- ・相当の期間（30日を目安とする）欠席を余儀なくされている疑いがある場合
- ・いじめられて重大事態に至ったという申立てが生徒や保護者からあった場合

(2) 重大事態の対応

「重大事態」を全教職員が理解し、以下のとおり、対応にあたる。

① 調査を行う組織

法第22条に基づく組織を母体とする調査組織を設置する。調査にあたっては、公平性、

中立性確保の観点から、いじめ対策委員会を母体として当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係又は特別の利害関係を有しない者の参加を図る。

② 調査の実施

教育委員会の指示及びガイドラインに基づき、適切かつ迅速な対応を組織的に実施する。事実関係を明確にするために、重大事態に至る要因となったいじめ行為が、いつ（いつ頃から）、誰から行われ、どのような態様であったか、いじめを生んだ背景や事情や生徒の人間関係にどのような問題があったか、教職員がどのように対応したか、などの事実関係を可能な限り網羅的に調査する。その際、因果関係の特定を急ぐことなく、客観的な事実関係を速やかに調査する。

③ 調査結果の提供及び報告

調査で得た情報は、生徒及びその保護者に適切に提供する。また、市教育委員会を通して市長に報告する。

9 学校いじめ防止基本方針について

- (1) 毎年度、学校いじめ防止基本方針にある各施策の効果を検証し、学校いじめ防止基本方針の見直しを検討する。
- (2) 検討の結果、必要があると認められるときは、その結果に基づいて必要な措置を講じる。
- (3) 学校いじめ防止基本方針は、児童生徒、保護者、地域に公表する。